# 『自然の征服』

## 一必然の国から自由の国へ一（1）

福岡大学講師　平田喜久雄

### 現代講座（17）

（一）

一昨年だつたか、「山」というアメリカ映画があつた。共産主義者として、一時アメリカから追放されたエドワアド・ドミトリクの作品である。映画としては、案外詩情がなく、平凡であつた。ただ岩壁をよじ登るスリルやその技術的撮影は相当なものであつた。この点では、最近日本で封切られた「氷壁」などは問題にならない。

私が、ここに、「山」という映画をひつぱりだしたのは、映画批評をするためではない。

週刊朝日の試写欄でなされたQ氏（津村秀夫）の映画批評の次のような一節をみなさんに紹介したかつたからである。

「危険な登山というものに更に興味のない筆者などは人間がなぜサルの真似をすることに価値があるのか一向に感動をもよおさない」

あれから二年ちかくたつた現在でも、この一節は私の頭にこびりついてはなれない。

人間は山に登る。人間は生命を賭してマナスルを征服しようとする。なぜ？何故に？

「氷壁」の主人公は「すきだから山に登る」といつて死んだ。個人的にはみなそうだろう。だからといつて、それがサルの真似で価値のないことであろうか？

（二）

昨年の第十一回朝日国際マラソン福岡大会で、広島庫夫選手が、2時間21分40秒という日本最高記録で優勝したことは記憶にあたらしい。このレースは想像もされない激しいものであつたらしい。この日、私は研究会で大牟田にいつていたから、このレースをみていない。

一昨年のこの大会には、私は西新町の住宅から天神町まででかけてきた。そのとき、私はマラソンレースの激しさに心をうたれた。

流れでる顔の汗を素手でふきふき走るカルボーネン、真黒い顔に白い歯をくいしばつて、カルボーネンを追う重戦車のような広島選手、さらに西田、浜村、それから名も知らない選手達が、必死の表情をして人垣の中から、次々に走りでてくる姿に身のしまる思いがした。

私は最後の選手が目の前を走りさるまで呆然としていた。私には順位なんか問題でなかつた。マラソンそのものの苛烈さにうたれたのである。

この場に、朝日のQ氏がいたら次のように云うだろう。

人間はなぜ走るのだろうかとある人は答えるだろう。

レースに勝つためだと。

もちろん、それも正しいだろう。しかし、私は「勝利をうる」ということをとおして、それ以上のことをなそうとする人間の意思力にうたれたのである。「走る」ということにおける人間の能力の限界を、一分でも、一秒でも短縮しようとする人間の努力に頭がさがつたのである。

（三）

そもそも、人間は自然を征服し支配することによつて発展してきた。自然に征服されて滅亡した動物は数えきれない。人間だけが自然に積極的に適応し、自然を変化させて現在にいたつたのである。

地球上に発生した動物から人間になつたという事実そのものが、一つの自然の変革であり、自然の征服である。

人間は、河には橋をかけ、海には船をうかべ、霧雨には避雷針をそなえ、洪水には堤防をつくつて自然を征服した。

マナルスの踏破、南極探検、すべてが自然への挑戦であり、征服への努力である。人類の平均寿命をのばす医学的努力、これもまた然りである。

このように、自然を征服するほど、人間の社会は進歩発達するのである。

われわれの先人は、この努力を常に重ねてきた。それぞれの方向における人間の努力が、現在の人間を形成したのである。人間のもつ能力の限界は、すべてこれら祖先の努力の結果である。われわれは、さらにこの人間の能力の限界を拡張しなければならぬ。

さて、この自然の征服と、みなさんの目標とされる社会主義社会の建設とはどんな関係があるだろうか。

このような疑問をもたれはじめている人があるかもしれない。

したがつて、次の私の講座の順番には、これらの点をのべることにいたします。

（未完）

# 高島の態勢は万全

## 重点ストト十五日目

### 平島指導オルグより第一信

十三日からの一斉全面ストライキを第三波にわたつて実施したが、ゼロ回答を固執する日経連の指揮のもと炭労経営者も頑としてわれわれの要求に応じようとしない。炭労はあらゆる戦術を検討した結果、二十一日から原料炭を主とする十五支部を無期限ストライキに突入させた。

九州では三井山野、三菱高島、三菱崎戸の三山がこの指令にもとづいて無期限ストライキに突入したことは既報の通りである。

その中の三菱高島に三十一日より指導員として派遣されている平島編集部長より第一信として、無期限ストライキ十五日目を迎えた高島の模様を四日つぎの通り伝えてきた。（以下原文のまま）

× × ×

三十一日午後二時、長崎より船で高島に着いた。島は全体が三菱高島炭鉱の構内でありまた社宅である。狭い島の中央部に海抜百五十米の小高い丘があるが、この丘にむかつて社宅やアパートのビルが重なり合つたように建てられている。

組合事務所は船の停泊する港から約三分でとどく近い所にある。組合事務所は三鉱労組の支部事務所ぐらいの大きさで、事務所内はさすがに無期限ストライキに突入している組合の様相を呈し、執行員闘争員、主婦会の出入りがはげしく、活発である。壁には総評の原口委員長の檄をはじめ、檄電がズラリとはりめぐらしてある。三池労組、三池労組中央委員会、阿眞根参議などやはり組織に関係のある面は目ざとくうつる。

先発の溜池次長と逢い、指導員の責任者である九炭労長崎事務局長長谷川氏より現地高島労組の役員の紹介があつた。

みんな予期以上に元気である。これも六十三日、四十三日（期闘）とつみ重ねられた重点スト組合の訓練された組織活動が一挙手一動の中に伺われ、力強さを感じた。

## 全部が原料炭のドル箱

この高島は長崎より船で一時間三十分ぐらいで、東支那海に面した島でその周囲は一里ぐらいだと聞く。人口一万五千人が住んでいる高島労組の組合員は約二千六百四十八人で、島全体が炭鉱であり、また社宅街である。平常出炭は二千百五十屯（全部原料炭）で三菱のドル箱である。

指導員は、さきに述べた長谷川事務局長（三菱崎戸出身）、三井田川の篠原編集部長、杵島の高村労働次長と三井三池の私、計四名でいづれも一くせ二くせもある組合（高島勤労課長は名門揃いという）揃であることは間違いない。

着任と同時に組合員や主婦会の意識の点を先任の指導員諸士に聞いたところ、やはりさきに述べた通り幾度の闘争にチャンピオンとしての経歴があるので、ゆとりのある態度だと説明してくれた。

これもカンパ態勢があるからだということも否めない事実で、如何に闘争資金が必要であるかを痛切に感じられた。

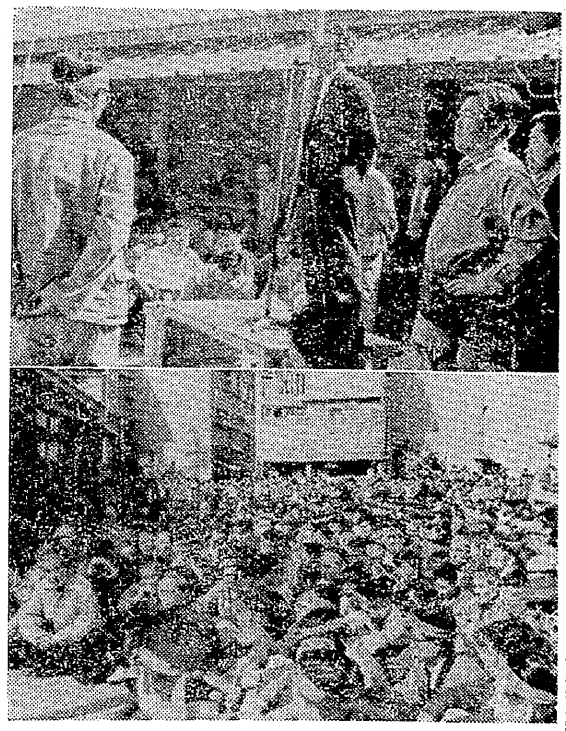
### 主婦会は物価の監視

闘いを進めるための統制事項として、組合員が島より出る場合は、組合長の決裁をうけねばならないということと、毎日それぞれの地域で着到をしなければならないことがきめてある。

この中でうた声運動や学習活動をもたれているということを聞く。

組合事務所の前に会社の売店、生協、マーケットがある。主婦会の幹部は交替で物価の調整、検査などの監視を行い、スト期間中の出費を最少限度に抑える活動を行つている。

ここの主婦会（炭婦協）は結成して約五年になるが、この間職制側に立つ主婦会との対立で組織的な苦労も相当あつたが、主婦会販売店（生協の前身）選挙闘争、六十三日、四十三日のストをのりこえて闘つた歴史は三池の主婦会に負けず劣らずの活躍で、地味で堅実な離島の主婦会活動の困難さが推測されるが「台所は守り抜く」の決意は固い。



高島での決起大会、上は保安要員無断転用でつるし上げられた壇上鉱務部長、右側労仂部長

### 会社も長期化の構え

高島炭鉱は六十三日、四十三日のストライキで承知のように自然発火が起るところで、私が着任した三十一日も採掘した坑道は完全という程までに密閉、その他の自然発火対策を会社は講じていて、会社も相当長期態勢をとつているのではないか（溜池次長談）と予想される。

いま山元で問題になつているのは保安要員中の採炭、掘進、仕繰、運搬職種のものの賃金をどのような額で支払うかということで団交が行われ、私たちも傍聴の格好で団交に出席した。

参考まで簡単にその概要を説明すると、採炭の場合は通常離島では基底給、年令給、勤続給、職種によつて固定され、遂行分として動くものは、展開時平均一三・二六一であるが、さらに山元協定の発展として、過去の実績の一・三九の上昇率をもつて、遂行分も固定化（四六一・一）している。

いいかえると、採炭は出炭の如何にかかわらず、固定給プラス四六一・一となつているが、日曜作業のときは、二七七から四六一の間五種に分けて支払われている。

そこで会社は保安要員として出る人の賃金も、そのランクの中間位の三六二・一で支払うと主張しており、組合は通常の場合の賃金支払いを要求しているのが対立点である。（以下、運搬も同様なケースであるので省略します）

### 山焚炭に赤信号

また会社は能率給の件と別個に、(1)現在坑内に実（炭）函八五〇函が立つているのでこれを捲きあげてもらいたい。(2)山焚炭（一日一五〇屯消費）が四、五日で払底するので坑内より確保してもらいたい。と提案してきたが、

組合は炭函は捲かない。山焚炭は当然長期闘争は予想されていたのだから売炭せずに置くべきであつた。このようなことは会社の責任でそれぞれストライキに入つていない山から買付すべきだという主張を行つている。

高島労組はこの申入れを会社に行うとともに、高島より三浮の地点にある端島（軍艦島、三菱）に共闘を申込み、山焚炭の出荷を行わぬよう要請、端島労組も同じ資本別であり、これまでの共闘からしても出荷は拒否するものと予想される。

### 闘いの焦点

これからの問題は、自然発火、保安要員の能率給、山焚炭ということが問題になり、指導員として如何にして原料炭拒否の戦略コース選択に高島労組の活動をより一層効果あらしめるようにするかということで、微力を尽さなければならないと強く感じています。

# 『街頭署名行う』

### 最賃制で中小労連

大牟田中小企業労組連合会では去る三十日（日）銀町と松屋前の二カ所で「最低賃金制確立促進」と「ILO（世界労働機構）条約批准促進」の街頭署名を行つた。この日集つた署名数は約四百。

### 日本準備会を結成

世界平和評議会のよびかけによる「軍縮と国際協力のための世界大会」は来る七月十六日から二十二日までスエーデンのストックホルムで開かれるが、日本でもこの大会を成功させようと準備会を結成して活動することとなつた。

# 『管生事件』のからくり

辯護士　諫山　博

東大教授陣の鑑定書によると、管生駐在所の爆破は「室内にあらかじめ装置せられてあつた爆発物件の爆発したものであると推定いたします」ということになつた。

かねて予期したことはいえ、こうはつきり結論がでてみると、あまりのことに身ぶるいする。駐在所の内部に仕掛けられた爆発というのだから、被告が犯人でなかつたことは明らかだ。それでは誰が駐在所に爆発物を仕掛けたのかということになると、犯人は警察官のほかには考えられない。警察官が駐在所のなかでダイナマイトを爆発させ、駐在所の近くにおびきよせた共産党員を捕えて犯人に仕上げたというのが、鑑定書からみちびきだされる論理である。警察のデツチあげだという弁護団の六年ごしの主張は、科学によつてあつけなく証明されたわけである。

それにしても、科学は正直なものである。あれほど手のこんだデツチあげのからくりが、鑑定書によつて一挙にときほぐされた。ラジオの座談会で弘津警察局長は、こういう鑑定がでるようでは科学が信ぜられませんとこぼしている弘津局長が信じようと信じまいと科学は管生事件のからくりを、遺憾会釈なく白日のもとにさらけだしてしまつた。

歴史のなかでは、数えきれないくらいのデツチあげ事件が明らかにされている。権力と弾圧はつきものであり、弾圧とデツチあげは不可分の関係にあつたといつても過言ではない。しかし、管生事件ぐらい陰険に仕組まれたデツチあげは、あまり例がない。そしてまた、デツチあげの爪あとが管生事件のばあいほどむきだしにぱくろされたことは、前代未聞である。

世間にはヘソ曲りの男がいて、いくら証拠をならべてデツチあげの話をしても、信用してくれない人がいる。自己の体験したこと以外は一応疑つてかかるという実証主義は、ある意味では珍重にあたいする。だが管生事件になると、そうはいかない。管生駐在所が内部の仕掛けで爆破されたというのは、科学のひきだした結論である。管生事件のデツチあげを信じないことは、現代の科学を信用しないことである。人工衛星のとんでいるのを目撃したことがないから人工衛星の存在を疑うにひとしい、時代ぱなれのしたナンセンスである。

東大の鑑定書が覆えされないかぎり、被告の無罪は疑いない。これで有罪判決でもくだされようものなら、裁判の自然科学の法則をふみにじるという由々しい結果になる。

中世の魔女裁判の時代ならいざ知らず、いまどきそんな非科学的な裁判があろうとは思われない。だが管生事件は、被告が無罪になつて万事めでたしということにはならない。

誰が駐在所にダイナマイトを仕掛けたのか。いまになつてみれば、こちらの方がむしろ大問題だ。ダイナマイトを仕掛けた真犯人をさがしだすことは、さしあたり検察庁が本気でその仕事にとりくんでくれるかどうか、きわめて疑わしい。

多くのデツチあげ事件がそうであつたように、この事件の真相を究明する仕事も、結局はわたしたち国民大衆の肩にかゝつてきそうである。

（昭・三三・三・二六）

### 勤評反対を決議

荒尾市の第四小学校PTAは、総会で勤務評定反対の決議を行つたが、この決定を行うまで、繰り返し懇談会を行い、徹底した大衆検討を行い、その盛り上りを待つて総会討議に持ち込み全会一致を得たものである。この懇談会は、昨年の六月から行つていたものであるが、特に三カ月程前から勤評問題に重点を置いて、〇本会長以下各役員、学校側も出席して膝つき合せて話し合い、現在この懇談会は八十回に達しており、これらの地味な目に見えない努力が実を結び、さらに強力に闘いの態勢が進められているのである。